



Hokkaido Lifelong Learning Association

# ほっかいどう 生涯学習 Lifelong Learning

ホームページアドレス <http://www.hsgk.jp>

新しい自分との

出会いや発見がきっとある



## 目次

- |                        |     |           |   |
|------------------------|-----|-----------|---|
| ●生涯学習協会「23年度事業計画の概要」…… | 2～3 | ●私の生涯学習…… | 5 |
| ●これからの生涯学習を展望して……      | 4   | ●随想13……   | 6 |
| ●わがまちの生涯学習……           | 4～5 |           |   |

## 生涯学習協会「23年度事業計画の概要」

事業名	内容
1 生きがいづくり生涯学習促進事業	<p>国際化、高齢化、情報化等社会の変化に対応し、生涯にわたって生きがいのある人生をおくるために、「生きることはまなぶこと」の視点から、道民の方々に学習の機会を提供する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○テーマ 「人生を共に豊かに過ごすために」</li> <li>○期間 5月～1月</li> <li>○会場 全道9会場</li> <li>○対象 道民</li> <li>○内容 講演・テーマ別バズセッション等</li> <li>○人員 1会場100人</li> </ul>
2 広報紙発行事業	<p>会員及び生涯学習関係機関、団体等に広報紙を通して情報を提供し、生涯学習の振興に寄与する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○回数 年4回</li> <li>○部数 1回 1,200部</li> </ul>
3 かでの講座事業	<p>道民の学習ニーズや今日的課題に焦点をあてた講座を開設し、道民への学習機会を提供する。</p> <p><b>1 かでの講座</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○開催回数 10回 (平日8回、土曜1回、平日夜間1回)</li> <li>○開催時期 10月～2月</li> <li>○会場 かでの2・7</li> <li>○対象 道民</li> <li>○講座時間 1講座2～3時間</li> </ul> <p><b>2 かでの移動講座</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○開催回数 10回</li> <li>○開催時期 5月～10月</li> <li>○会場 道立近代美術館他</li> <li>○講座時間 1講座2～3時間</li> </ul> <p><b>3 自然・歴史観察講座</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○開催回数 3回</li> <li>○開催時期 5月～10月</li> <li>○会場 野幌自然公園他</li> <li>○講座時間 1講座3～4時間</li> </ul>
4 「道民カレッジ」大学放送講座支援事業	<p>広く道民の学習活動を支援するため、大学放送講座のテキストを作成し、新たな「ほっかいどう学」の取組である地域の学習活動への活用を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○作成部数 600部</li> <li>○発行時期 8月下旬</li> </ul>
5 学習成果実践事業	<p>道内各地で学習活動している道民が、その学んだ成果を活用して、自ら講座を企画・実施し、地域づくりや人づくりを担う実践力を育成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○開催期間 7月～</li> <li>○会場 道内5会場</li> <li>○対象 道民</li> <li>○内容 道民カレッジボランティア連絡協議会の会員を中心に企画・実施</li> </ul>
6 「道民カレッジ」ボランティア(カレッジ・ボラ)活動支援事業	<p>道民カレッジの充実と推進を図るため、「道民カレッジ全道ボランティア連絡協議会」の自主的・自発的な活動に対し支援する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○人数 約100人</li> <li>○活動場所 全道6圏域</li> </ul>

事業名	内容
	<p>○活動内容</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・カレッジ事業への運営協力、支援</li> <li>・学習相談</li> <li>・単位取得方法及び称号取得へのアドバイス</li> <li>・カレッジ生の加入促進</li> <li>・新規講座の企画、実施の推進</li> <li>・情報交換</li> </ul>
<p>【特別会計事業】 7 ほっかいどう生涯学習ネットワークカレッジ（道民カレッジ）事業</p>	<p>学習ニーズの多様化、高度化に対応するため、学ぶ意思のある道民のすべてを対象に産学官が連携して総合的な学習機会を提供するとともに、自立した北海道の創造に寄与する人材を育成する。</p> <p>○主催講座</p> <p>1 道民カレッジ「ほっかいどう学大学放送講座」 テレビ放送を活用して、道民が居住地域に関係なく、道内のどこでも大学の講義を受講できるよう、参加大学と連携して高度で専門的な講座を提供する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・放送回数 5回</li> <li>・放送開始 10月</li> <li>・対象 道民</li> </ul> <p>2 道民カレッジ「ほっかいどう学出前講座」 地域課題の解決に取り組む市町村等に講師等を派遣し、地域づくりを担う人材の発掘や育成を図る講座を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・回数 12回</li> <li>・対象 地域づくり実践者、関心のある道民</li> </ul> <p>○連携講座</p> <p>道民カレッジに賛同する大学等や市町村、民間教育事業者等が実施する講座を体系化し、道民に講座情報を提供するとともに、生涯学習のネットワーク化を図る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・目標講座数（前期・後期） 2,850講座</li> <li>・目標受講者数 66,000人</li> </ul> <p>○普及啓発・情報提供</p> <p>道民カレッジ事業についての普及啓発及び情報提供を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・道民カレッジガイドブックの作成及び配布</li> <li>・道民カレッジだよりの作成及び配布</li> <li>・ポスター、リーフレットの作成及び配布</li> <li>・道民カレッジ手帳の作成及び交付</li> <li>・ホームページによる情報提供</li> </ul>
<p>【特別会計事業】 8 生涯学習情報資料の展示・提供事業（まなびの広場）</p>	<p>生涯学習に関する図書・資料・リーフレットなどの展示・提供及び道内市町村・団体の生涯学習の取組や成果を紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ビデオレファレンスコーナー ビデオ・LD・エルネットの視聴</li> <li>・ふるさとコーナー 道内市町村の広報紙及び情報リーフレットの展示</li> <li>・道民カレッジ情報コーナー ガイドブック・リーフレット・ポスター及び連携講座関係資料の展示</li> <li>・展示コーナー 道内市町村及び団体の生涯学習活動に関する実践・成果等の展示</li> </ul>
<p>【特別会計事業】 9 教材貸出事業</p>	<p>生涯学習活動の振興を図るため、学習活動に有用な視聴覚教材を官公庁、学校、社会教育関係団体等に貸出を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・16ミリフィルム、ビデオ、DVD等 5,442本</li> </ul>
<p>【特別会計事業】 10 北海道体育指導委員協議会受託事業</p>	<p>北海道体育指導委員協議会の事業受託により、道民の生涯スポーツ活動を促進し生涯学習社会の実現に寄与する。</p>

## これからの生涯学習を展望して

道民カレッジ運営委員会会長 町井 輝久

### 道民カレッジの10年とこれから… 学習者が支え、創るカレッジをめざして

昨年の12月23日クリスマスイブの前日でしたが、韓国京畿道始州市で「道」民カレッジを立ち上げるためのシンポジウムが開催され、その基調講演として日本の「道民カレッジ」について活動の成果や課題について話すように依頼されました。京畿道というのはソウルの周辺の地域で、日本でいえば千葉・神奈川・埼玉の3つの県に相当します。

日本の県民カレッジの活動の経験を踏まえて、韓国でも学習の成果の活用やまちづくり学習を推進するために「道」民カレッジを立ち上げようということでした。韓国でも住民自身によるまちづくりへの取り組みが進んでいて、ボランティア活動も活発です。韓国では日本の県民カレッジという「道民カレッジ」を思い浮かべる生涯学習関係者が多いようで、道民カレッジとの交流を期待する声も少なくありません。

道民カレッジは平成22年で10年になりました。道民カレッジはネットワーク型の生涯学習機関として、全国の県民カレッジ（32カレッジ）のなかでも、道内の多くの大学・専門学校、教育機関と連携した県民カレッジとして高く評価されています。道民カレッジは、多様な道民の学習ニーズにこたえる学習機会を提供して、ほっかいどうのまちづくり、人づくりを目指し、「ほっかいどう学」を軸に、テレビ放送講座、ほっかいどう学出前講座、自主講座などを行ってきました。この活動の中で受講生のなかから道民カレッジボランティアが生まれ、活動を支え、地域での学習活動を拡げています。また、ほっかいどう学はほっかいどう学検定推進機構と協力し、北海道への学びを深めるとともに、学習成果の北海道づくりへの活用をめざしています。このような活動の中で学位取得者による道民カレッジボランティアも100名近くが参加し、検定合格者も300名以上の学ぶ会として組織され活動を始めています。そしてこの10年の歩みは事業を受託してきた北海道生涯学習協会の献身的な活動によって支えられてきました。

このような成果を上げてきた道民カレッジですが、しかしここ数年間、国の生涯学習振興策は大きく後退し、また地方自治体の財政危機が問題になる中で、次の10年を見通すビジョンが必要になってきています。なによりも道民カレッジへの学習参加から生まれたカレッジボランティアの活動を支援するとともに、カレッジの学習活動の多くがボランティアの参加と創意工夫によって推進されることが望まれます。学位取得を目指す学習活動は、単なる個人の学習にとどまらず、学びを広げ、学びを活用する様々な力を育てます。学習者自身による道民カレッジの運営を目指すことが課題です。また、道民カレッジの基本目標である北海道のまちづくり・人づくりへの貢献をめざし、北海道を学び、北海道を愛し、自らの手で北海道づくりを進める道民の学習の場として高等教育機関との連携だけでなく、市町村や地域の団体と連携して、道民カレッジを「ほっかいどう学」の学びのセンターに育て、先人が取り組み、今地域で取り組まれている様々なまちづくり活動について、社会人だけでなく、大学生や高校生・中学生もともに学ぶことができる学習の場とすることが求められています。そのためにも「ほっかいどう学検定」をよりよい検定に発展させる努力が望まれます。

「自ら考え、学びへの意欲を育て、学んだことを活かすことのできる」明日の道民を育てるネットワーク型のカレッジという原点を踏まえて、学習者自身が育てる道民カレッジということをめざすことを期待しています。

## わがまちの生涯学習

安平町教育委員会

安平町からは、「協働の仕組み」をキーワードとした生涯学習推進の試みをご紹介します。

### 【学校教育と社会教育の協働】

学社融合が初めて提唱されてから久しく経ちますが、安平町の学社融合事業（授業）は道内でも高い評価を受けています。その理由として、学校教育と社会教育がねらいを持ち寄り、協働して「授業づくり」を行っていることが挙げられます。“安平川の学習”を例にとると、学校教育としては、町を流れる川の役割と生態系、

生活との関わりを学ぶ“総合的な学習の時間”に位置付け、社会教育としては、町の大切な川として環境保護の意識を涵養することを軸に、地域の人材やフィールドの活用、そして安平川フォーラムという団体主催の社会教育行事との融合事業として、有機的な形で行われています。協働の「授業づくり」によって学社双方に恩恵が得られるよう計画しているので、団体が持つ力を注ぎ込むことで子どもたちは興味や関心が高まり、同時に子どもとの関わりの中で団体は次への意欲を得ています。さらには安平川が郷土の愛すべき川として認知されているなどの成果も挙がっています。このように、「授業づくり」という協働を通じて、人・知・自然をはじめとする“資源”に付加価値と循環を生む学社融合事業は、地域全体の生涯学習の高まりが期待できる仕組みであると考えています。

### 【住民と行政の協働】

時代などを背景に必要課題とする学習は、社会教育担当者が明確なねらいを掲げ、実施に努めています。しかし、人々の生活に直結する学習要求や、参加しやすい事業づくりを実現するには、住民のアイデアや提案が不可欠であると考え、住民と行政の協働による社会教育事業企画検討会を開設しています。

この検討会は、単年度ごとに「生涯学習ボランティアスタッフ」を公募し、代表者も設けず、何よりも自由な発想を大事にする会です。活動は、月1回の会議の中で、各自が持っている情報を交換したり、地域の学習要求を確認しあったりしながら事業を形づくっていきます。そして事業当日は運営スタッフとして参加し、事後反省までを社会教育担当者との協働で行っていきます。この協働により生まれた事業には、冬の一大イベントとして成熟させるべく協働の輪を一層広めるため、現在は実行委員会形式で実施している「安平町ロビーコンサート」があります。これは、数百個のアイスキャンドルを並べ、その幻想的な灯りの中で音楽を楽しむというコンセプトの事業です。この2月で9回目を終え、立ち見も出る200名超の参加者が集まる事業に成長しています。

以上、安平町における「協働の仕組み」による生涯学習推進の事例の一端をご紹介いたしました。

「良いものはまねぶ」という言葉がありますので、今後の事例紹介を楽しみにしています。

(教育長 豊島 滋)

## 私の生涯学習

### 若者に教えられたこと

中富良野町教育委員会教育長 松藤 藤吉 (北海道生涯学習協会理事)

若者をとりまく社会の状況は、決して明るいものではありませんが、中富良野の若者は、自ら楽しみ助け合い、未来へダッシュしようとしています。

本町の青年団活動も、一時期は消滅の危機に瀕したこともありましたが、町内の職場に勤務する若者が中心となり、仲間を募り現在30人までに復活しました。そのわけは、自ら楽しみ、地域社会に参加しようとする彼らの意欲にあるものと私は思っています。

たとえば、毎年好評の「出張サンタクロース」は、クリスマスプレゼントを親から預かり、サンタクロースとトナカイに扮した若者がクリスマスの夜に子どもたちに直接プレゼントするという楽しい企画です。クリスマスが近づくと、広報やPRチラシで知った親御さんがプレゼントを預けに公民館へやってきます。

すでに、親たちも窓口の青年もクリスマスモードになって打合せに余念がありません。当日は、トナカイに扮した若者がドライバーを担当し、サンタクロース衣装の若者が後部座席に鎮座している姿や、トナカイがチャイムを鳴らし、サンタクロースが「メリークリスマス！」とクラッカーを鳴らして玄関を歩いていく様子はおもしろくも楽しい見せ場です。

今年で7年目となった「出張サンタクロース」は、町内の子どもたちに夢を与えています。この事業を始めた若者は、「サンタクロースを信じていた子ども時代を思い出し、今度は自分たちがサンタクロースになって、夢を与えたいと思った。子どもたちの驚いた顔を見るのが楽しい」と話しています。

生涯学習は自らの実践であることはもちろんですが、私たちの思いつかない次元からの発想と行動力に触れることもその一端ではないかと思いました。若者たちには、これからも自ら楽しみ、人に幸せをあたえ、地域を元気づける存在であってほしいと願っています。

随想13

ドットな生活

最近、バックミンスター・フラー著（芹沢高志訳）の『宇宙船地球号』という本に出会った。それには「産業道具をつくる時、まず人間が使うのは手仕事道具だ。今日では、人間はきわめて啓発的に手を使う。もっぱらボタンを押すだけだが、そこで起こされた行為がさらなる道具の行為を引き起こし、ほかの道具を再生産し、そのできた道具がふたたび啓発的に使われて、さらにほかの道具がつくられていく。」と書かれていた。本来は手仕事道具でものをつくっていたのが、現代ではボタン操作を行う手がものをつくっていくという図式に変化したのである。

ボタン操作を行うのは人の指である。タイプライターからワープロ（ワード・プロセッサ）、パソコン（パーソナル・コンピュータ）へと時代が変わり、指の活躍度数は機械の性能の高まりと正比例して高まっているといえよう。それは何もパソコンだけに限ったことではない。若い世代には理解できないと思うが、テレビのチャンネルはかつて回すものであったが、今やリモコン（リモート・コントロール）

によって、指で押すのである。ゲーム機もそうであり、家庭内の電化製品はみなボタン操作でしか動かせない仕組みになっている。外に出てみても、地下鉄の切符を買うのもエレベータのボタンも然りである。ATMも指先が活躍する。

このように、今やドット（点）を指先で操作する生活が当たり前になってきている。私もそうであるが、こうなると漢字が書けなくなってくる。ドットに対するものは線であろう。漢字は書き順が定められており、線を連ねる草書体などでは優雅な習字となって日本の美しさを表現しているのである。つまり、そこに日本人らしさや日本文化のひとつが線を通して維持されているのであろう。ドットのすべてを否定するつもりはないが、線も否定してはいけないと思うのは私だけではあるまい。線は人と人をつなぐ大事なものと考え次第である。

最近の携帯電話の性能の高度化についていけない私の戯言と笑って読み飛ばすことを願います。

(財)北海道生涯学習協会  
会長 宇田川 洋

編集後記

- ・2011年3月11日に東北の太平洋沖を震源とする大地震が発生。マグニチュードは9.0。
- ・規模は、1923年の関東大震災の約45倍の大きさ、さらに1995年の阪神大震災の約1450倍だそうである。
- ・地震のあとの津波は、想定して対策を講じていた設備を軽々と乗り越え、人間が生活していた社会を根こそぎ破壊してしまった。住居も街も田畑も人の命も。
- ・さらに追い打ちは、漏れたガソリン等による火災と原子力発電所の事故。2重3重の災害に見舞われている報道に接し、心が張り裂けそうである。
- ・地震発生の時、かでの2・7の9階にある事務室は、震度3の大きな揺れに襲われていたが、皆平然と仕事を続けていた。

- ・会議室の講座等も何もないかのように続けられていた。
- ・現職時代に、災害対策で四苦八苦した経験を持つ者としては、退避の準備態勢に入らなくてよいのか、ビル管理者からの情報伝達・退避の非常放送はなくてよいのかと不安になった。
- ・非常放送があるまでは「安心」と思う意識は、他力本願であり、ちょっと怖い。
- ・「想定を遙かに超えた」地球のエネルギーの地殻変動がもたらした今回の大震災から、何を学んで、どう対応して生きていけばよいのか、日々の生活の中でしっかり受け止めなければいけないと思う。
- ・今回の大震災で被災された多くの方にお見舞い申し上げますとともに、お亡くなりになった方々のご冥福をお祈りします。